

一言の重さ、というか、それが生み出す波紋について考えさせられた本を紹介したい。

「典子44歳 いま、伝えたい 『典子は、今』 あれから25年」

光文社

皆さんは「典子は今」という映画を憶えておられるだろうか。サリドマイド児として生まれながらも、努力を重ねて、熊本市役所に就職するまでの生き方を丁寧に追跡した作品だ。「あれから25年」の副題で、9年前、自伝が出された。

著者は21歳の時結婚し、一男一女に恵まれる。夫のこと、結婚までのいきさつ、子育ての泣き笑いが写真入りで紹介され、映画の続編を見ているようだった。その後、市役所を退職。講演活動を開始する。今の一瞬一瞬を大切にす前向きな生き方で現在も多くの人に元気と勇気を発信し続けている。

小学校一年時の担任の記録が目を引き。入学して間もない頃、事故防止のため、先生達が順番に先頭に立ち街角まで引率した。ある時、当番の一教師が担任に言う。「典子って子、急に私の服にガブってかみついたの。びっくりしちゃって…」担任は典子呼んで叱った。

しかし真相はこうだった。みんなが口々に先生の名を呼んでまわりつく。自分も甘えたくてたまらなくなった。しかし、抱きつく手がない。だから身をすり寄せて先生の服をかんだのだった。その事実があとになってわかったという。

ここまで読んでため息が出た。叱る前に「どうしてあんなことをしたの？」と何故聞かないのか？後になって事実がわかったって遅すぎないか？

これと対照的なできごとが中学入学の時に起こった。周りは知らない顔ばかり。緊張と不安のうちに初日はたちまち過ぎた。二日目、授業が終り、机の中の本を足で取り出したそ



の時、前の席の男子が近づいて来た。何も言わずに教科書、筆箱、ノート、弁当箱すべてを鞆に入れてくれた。「いいよ自分で出来るから」というべきか否か黙って見ていた。「ありがとう」と辛うじて小声で言った時には男子は席に座っていた。翌日からは、何でも足で出来ると知った彼はもう手伝わなかった。しかし、中学に入って初めて受けた異性の親切は嬉しい思い出として、以後彼女を支え続けた。

言葉は闇を切り拓く武器になる。人の絆を強めたり切ったりもする。粉飾を施し騙したり裏切ったり者の者さえいる。心しなければ。